

大学生における強迫的心性と自閉症スペクトラム傾向

Obsessive-compulsive symptoms and autism spectrum tendencies in university students

大宅 洋行*・清水 益治**

Hiroyuki Ohtaku

Masuharu Shimizu

強迫性障害に至らない心性として強迫性格をとらえ、その特性と自閉症スペクトラム傾向、さらに強迫性障害にみられる強迫症状の関連性について検討する。大学生を対象として、関山(2008)の強迫性格尺度と、細羽ら(1992)の日本語版モーズレイ強迫神経症質問紙(MOCI)そして若林(2004)の自閉症スペクトラム指数日本版(AQ)を実施した。MOCIを説明変数とする階層的重回帰分析の結果、AQの「注意の切り替え」と「細部への注目」、強迫性格の「優柔不断」といった尺度との有意な関連がみられ、自閉症スペクトラムの注意・注目に關する側面や強迫性格の優柔不断といった特性面との関連性が示唆された。

はじめに

青年期後期に位置する大学生は様々な不安を抱え、その時期特有の精神的不安定さを有している。日本学生支援機構(2016)は平成26年度の調査で、大学昼間部に通う学生の不安や悩みについて「希望の就職先や進学先へいけるか不安」との回答が66.9%あったことを報告しており、未知のことへの不安を抱えている結果が示された。

強迫性障害(Obsessive-Compulsive Disorder: OCD)は、強迫観念や強迫行為を特徴とする不安障害の一種で、障害有病率が約2.5%(竹内,1998)と高頻度な精神疾患である。OCDとは、耳に入ってきた音楽が頭から離れずにいたり、手の汚れが気になり何度も手洗いをするなど、自分では不合理と分かっている観念や衝動にとらわれ日常生活に支障をきたしている状態を指す。その一方で、OCDには至らずともそういった心性をとらえていく流れもある。Salzman(1968)は、強迫的パターンを単一の精神疾患としてとらえるのではなく、OCDから強迫的人格を経て、正常範囲の強迫的心性に至るスペクトラムとしてとらえる、強迫性格の重要性を示した。さらに、強迫はOCDにもっとも典型的に現れるが、統合失調症やうつ病といった内因性精神病、脳器質性障害、パーソナリティ障害、小児や健常者にも認められ(加藤・濱田,2007)、一般大学生のこのころの問題を検討する上でも重要な要因であろうと考えられる。

一方、自閉性障害は、Kannarにより対人交流の障害、話し言葉の特異性、反復的儀式的行動という特徴的な3症状をもった障害として症例が報告された。その後、症状や認知的能力の違いなどからアスペルガー症候群、広汎性発達障害、高機能自閉症などが明らかとなってきたが、近年、その障害の質や程度によりスペクトラム(連続体)をなしているという観点から、自閉症スペクトラム(Autism Spectrum Disorder: ASD)と呼ばれている。ASDの合併精神障害について神尾(2012)

* 帝塚山大学こころのケアセンター相談員(現代生活学部非常勤講師)

** こども学科教授

は、強迫的色彩の強い不安、すなわち心気症、離人症、OCD、摂食障害など強迫スペクトルとの親和性を指摘しており ASD と強迫的心性との関連は深いと考えられる。さらに、ASD でみられる常同行為やこだわりと OCD における強迫行為との関連も注目され(住谷, 2012)、ASD と OCD に関心が集まっているものの、その関連性についての研究は少ない。そこで、一般の大学生を対象とし強迫的心性と ASD の関連を調べることは、学生のメンタルヘルスについて検討する際の端緒となるであろう。

関連性を調べた研究の 1 つに大久保・大宅(2017)がある。この研究では、大学生における発達障害傾向と強迫性格ならびに、全般的な心身の健康度について質問紙調査を行った。その結果、「わがまま」因子は、行為問題、多動、対人関係などの発達障害傾向と関連することが見いだされた。しかしながら、発達障害と広い範囲での関連性をとらえたものであり、より病理的な水準としての強迫傾向については検討されていない。そこで本研究では、大学生を対象として、強迫性格と ASD 傾向および、強迫観念や強迫行為といった強迫症状の関連性について検討した。

方法

1. 調査方法

近畿圏 4 年生大学に在籍する大学生 403 名を対象とした。そのうち、記入漏れのあった質問紙を外し、350 名(男性 160 名、女性 190 名)を分析対象とした。手続きは、心理学に関する授業において質問紙を配布し、回答を求めた。

2. 質問紙

(A) 強迫性格尺度

強迫的心性における、強迫性格を調べるために、関山(2008)による強迫性格尺度を用いた。強迫性格尺度は、病的な強迫傾向ではなく健常者にも普通に当てはまるような性格特性を述べた内容に留意して構成されている。本尺度は、「完全追求」、「わがまま」、「良心性」、「優柔不断」の 4 下位尺度、20 項目からなる。各項目に対して「まったくあてはまらない(1)」から「とてもよくあてはまる(6)」の 6 件法で回答し、下位尺度、総合得点ともに得点の高い方が強迫性格が高くなるように採点される。

本尺度は本来高校生を対象としたものであるが、大宅・大久保(2014)は大学生に実施し、得点の分布や妥当性の検討から、本尺度は大学生においても使用できると判断されたので、本研究においても強迫性格の尺度として用いた。

(B) 日本語版モーズレイ強迫神経症質問紙(以下、MOCI)

強迫的心性における、強迫行為や強迫観念に関する強迫性障害傾向を調べるために、MOCI(Hodgson & Rachman, 1977)をもとに作成された、日本語版モーズレイ強迫神経症質問紙(細羽ら, 1992)を用いた。本尺度は、「いろいろなことを 2 度も 3 度もチェックするので、かなりの時間をつかってしまう」といった項目からなる「checking」尺度、「電車などで人と接触したとき、汚い感じがして気になる」といった項目からなる「cleaning」尺度、「嫌な考えが浮かぶと、そのことが頭から離れないことがある」といった強迫的思考に関する項目からなる「doubting」の 3 下位尺度、30 項目からなる。各項目に対して、「そうではない(1)」「どちらともいえない(2)」「その通りだ(3)」の 3 件法で回答し、下位尺度、総合得点ともに得点の高い方が強迫性障害傾向が高くなるように採点される。

(C) 自閉症スペクトラム指数日本語版（以下、AQ）

自閉症スペクトラム傾向を調べるために、AQ（Baron-Cohen ら，2001）の邦訳版である、自閉症スペクトラム指数（AQ）日本語版（若林，2004）を用いた。本尺度は、back translation を行って原版の項目と内容的に等価であることが確認され、成人の高機能自閉症あるいはアスペルガー障害群と年齢を対応させた統制群（健常成人）とで比較し標準化された尺度である。自閉症の症状を特徴づける「社会的スキル」「注意の切り替え」「細部への注目」「コミュニケーション」「想像力」の5下位尺度、50項目からなる。各項目に対して、「あてはまらない」「どちらかというにあてはまらない」「どちらかというにあてはまる」「あてはまる」の4件法で回答するが、採点法は若林（2004）に従い各項目で自閉症傾向を示すとされる側に該当すると回答すると1点が与えられ、得点が高い者ほど自閉症スペクトラム傾向が高いと判断される。総合得点の最高点は50点となるが、臨床群と統制群のカットオフポイントは33点となっており、AQの得点が33点以上であることは自閉症スペクトラム上において障害レベルと考えられている。

3.倫理的な配慮

調査前に、調査内容、個人情報やプライバシーの保護について説明した。また、質問紙への回答は対象者の自由意志とした。また、回答は無記名で行ったため、個人情報やプライバシーは十分に保護されていると言える。

結果

1.因子分析

強迫性格尺度、MOCI、AQの全ての各下位尺度について、最尤法、プロマックス回転により因子分析を行った（表1）。各因子は絶対値.30以上の因子負荷量を持つものを基準とした。第1因子にはAQの全ての下位尺度が抽出された。第2因子には強迫性格尺度の全ての下位尺度が抽出された。第3因子にはMOCIの全ての下位尺度が抽出された。また、因子間相関では第1因子と第3因子（ $r=.558$ ）や、第2因子と第3因子（ $r=.622$ ）の間に相関がみられたが、第1因子と第2因子の間には $r=.178$ と無相関であった。

2.尺度間の相関係数

表2に、AQと強迫性格尺度およびMOCIとの相関係数を示した。社会的スキルは、強迫性格尺度の優柔不断と正の相関が、完全追求と負の相関がみられ、MOCIのdoubtingやMOCI総得点およびcheckingと正の相関がみられた。注意の切り替えは、強迫性格尺度の優柔不断や強迫性格尺度総得点と正の相関が、良心性やわがままと弱い相関がみられ、MOCIのdoubtingやMOCI総得点およびcheckingと正の相関が、cleaningと弱い相関がみられた。細部への注意は、強迫性格尺度の完全追求や強迫性格尺度総得点および良心性と正の相関が、わがままと弱い相関がみられ、MOCIのcheckingやMOCI総得点に正の相関が、doubtingと弱い相関がみられた。コミュニケーションは、強迫性格尺度の優柔不断や強迫性格尺度総得点およびわがままと正の相関がみられ、MOCIのdoubtingやMOCI総得点およびcheckingと正の相関がみられた。想像力は、強迫性格尺度の優柔不断と弱い正の相関が、完全追求と弱い負の相関がみられ、MOCIのMOCI総得点やdoubtingおよびcheckingと正の相関がみられた。AQ総得点は、強迫性格尺度の優柔不断や強迫性格尺度総得点と正の相関が、わがままと良心性と弱い相関がみられ、MOCIはdoubtingや

MOCI 総得点および checking と正の相関が、cleaning と弱い相関がみられた。

表1 強迫性格尺度、MOCI、AQの下位尺度を投入した
因子分析の結果および因子間相関 (N=350, 最尤法, プロマックス回転)

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
コミュニケーション	.822	.118	-.092	.634
社会的スキル	.739	-.177	-.019	.519
想像力	.615	-.022	-.117	.311
注意の切り替え	.412	.053	.291	.418
細部への注意	-.376	.288	.188	.210
完全追求	-.147	.828	-.215	.524
良心性	.001	.729	-.108	.445
優柔不断	.276	.414	.245	.550
わがまま	.163	.334	-.036	.137
doubting	.017	-.042	.879	.745
checking	-.065	.086	.782	.649
cleaning	-.130	-.182	.420	.079
因子寄与	2.50	2.21	2.76	
因子間相関 (r)				
第1因子	-	.178	.558	
第2因子		-	.622	
第3因子			-	

太字は因子負荷量が.30以上のものを示す。

表2 AQと強迫性格尺度およびMOCIの相関係数

AQ	強迫性格尺度				強迫性格尺度 総得点	MOCI			MOCI総得点
	完全追求	わがまま	良心性	優柔不断		checking	cleaning	doubting	
社会的スキル	-.183**	.059	-.075	.212**	.003	.165**	.032	.275**	.214**
注意の切り替え	.063	.128*	.140*	.451**	.283**	.412**	.114*	.481**	.461**
細部への注意	.309**	.123*	.213**	.035	.248**	.199**	.121*	.102	.190**
コミュニケーション	-.055	.226**	.096	.410**	.242**	.318**	.044	.381**	.346**
想像力	-.111*	.098	.011	.183*	.063	.171**	.068	.178**	.189**
AQ総得点	-.005	.209*	.117*	.424**	.268**	.412**	.120*	.470**	.458**

**相関係数は1%水準で有意(両側)、*相関係数は5%水準で有意(両側)

表3に強迫性格尺度とMOCIとの相関係数を示した。強迫性格尺度の4下位尺度全てさらに強迫性格尺度総得点と、MOCIのchecking、doubtingおよびMOCI総得点との間で正の相関がみられた。

表3 強迫性格尺度とMOCIの相関係数

強迫性格尺度	MOCI			MOCI総得点
	checking	cleaning	doubting	
完全追求	.239**	-.002	.156**	.197**
わがまま	.193**	.101	.235**	.234**
良心性	.328**	-.045	.282**	.285**
優柔不断	.523**	.086	.570**	.550**
強迫性格尺度総得点	.465**	.051	.449**	.458**

**相関係数は1%水準で有意(両側)、*相関係数は5%水準で有意(両側)

3.階層的重回帰分析

MOCI の総得点（MOCI 総得点）を目的変数とした階層的重回帰分析（表 4）を行った。説明変数は第 1 段階で AQ の 5 下位尺度を投入し（モデル 1）、第 2 段階で強迫性格尺度の 4 下位尺度を投入した（モデル 2）。モデル 2 の決定変数は.406 で、変化量は有意（ $F(9, 340) = 25.78, p < .01$ ）であり、モデルとして有効であると考えられた。次に目的変数に対する効果の指標である標準偏回帰係数（ β 係数）の検討を行った。MOCI 総得点に関して、自閉症スペクトラムの注意の切り替え（ $\beta = .229, p < .01$ ）や細部への注意（ $\beta = .186, p < .01$ ）が、強迫性格では優柔不断（ $\beta = .386, p < .01$ ）のみ有意な効果を持つことが示された。

表4 MOCIを目的変数とした階層的重回帰分析の結果

	モデル1 β 係数	モデル2 β 係数
社会的スキル	.024	.057
注意の切り替え	.361**	.229**
自閉症スペクトラム 細部への注意	.223**	.186**
コミュニケーション	.156*	.031
想像力	.063	.058
完全追求		-.002
強迫性格 わがまま		.057
良心性		.058
優柔不断		.386**
決定係数	.280	.406

**相関係数は1%水準で有意（両側）、*相関係数は5%水準で有意（両側）

4.強迫性格尺度と MOCI について AQ 総合得点のカットオフポイントとの比較

AQ の自閉症スペクトラム上の障害レベルとして捉えられるカットオフポイントを若林（2004）は 33 点以上と設定している。今回の調査では 17 人（4.9%）がその範囲に含まれ、若林（2004）での 3%弱という数値に比べ、やや高い結果となった。そこで、AQ の総得点が 33 点以上の対象者（AQ 高群）と 33 点未満（AQ 低群）の対象者、両群で強迫性格や強迫症状に違いがみられるのかを調べるため t 検定を行った（表 5）。その結果、MOCI の総得点と、checking、doubting の平均が AQ 高群の対象者の方が 1%水準で有意に高いこと、また、強迫性格の優柔不断の平均が AQ 高群の対象者の方が 5%水準で有意に高いことが明らかとなった。

考察

自閉症スペクトラム傾向と強迫性格の関連について

AQ と強迫性格尺度の相関係数の結果は自閉症スペクトラムの特徴とその性格的側面から妥当な結果がえられたといえる。しかし、完全追求と社会的スキルとは負の相関がみられたものの、コミュニケーションとの間には有意な相関がみられず、強迫性格のわがままとコミュニケーションには正の相関がみられたものの社会的スキルとはみられなかった。自閉症スペクトラムの特徴と強迫性格の部分的な関連が示唆されたものの、自閉症スペクトラムの特徴である対人的関係性に関する側面と強迫性格の関連性には、今後の検討が望まれる。

表5 AQにおけるカットオフポイント前後でt検定の結果

	全体 平均±SD (N=350)	AQ<33 平均±SD (N=333)	AQ≥33 平均±SD (N=17)
完全追求	20.33± 4.74	20.29± 4.73	21.00± 4.96
わがまま	17.99± 4.31	17.93± 4.31	19.24± 4.21
良心性	20.27± 4.09	20.26± 3.98	20.29± 6.08
優柔不断	19.43± 4.50	19.31± 4.49	21.88± 4.11 *
強迫性格	78.02±12.19	77.80±12.05	82.41±14.38
checking	14.52± 4.03	14.37± 3.99	17.53± 3.68 **
cleaning	15.13± 2.19	15.11± 2.16	15.59± 2.72
doubting	13.01± 2.90	12.90± 2.85	15.12± 3.12 **
moci	42.66± 7.18	42.37± 7.06	48.24± 7.32 **

**は1%水準で有意（両側）、*は5%水準で有意（両側）

強迫性格と強迫症状の関連について

強迫性格尺度と MOCI の相関係数の結果は、強迫性格尺度の下位尺度全てと checking および doubting で有意な相関がみられた一方、cleaning とはみられなかった。関山（2008）は高校生を対象にして吉田（2000）の MOCI を用いての研究ではあるが、MOCI 総得点との間に強迫性格尺度全体と優柔不断において有意な正の相関を見出している。より十分な検討が必要ではあるが、年齢や立場による違いも考えられた。

強迫症状に影響を及ぼす要因について

強迫性格尺度等の相関係数では、交絡変数等の評価がじゅうぶんに行えないため、強迫症状を調べる MOCI を説明変数とする重回帰分析を行ったところ、自閉症スペクトラムの特徴の中でも注意の切り替え難さや細部への注目を高くもつといった傾向が、強迫症状が高い傾向がみられ、優柔不断といった性格が高いものが強迫症状が高い傾向にあった。また、強迫症状を予測する上では、自閉症スペクトラムの諸特徴のみからよりも強迫性格を含めたほうがより説明率が上昇することが明らかとなった。その上で、強迫症状との関連は一様なものではなく、自閉症スペクトラム傾向では主に注意に関する特徴との関連が示され、なおかつ優柔不断といった性格との結びつきが示唆された。

自閉症スペクトラム傾向と強迫的心性について

AQ でのカットオフポイント以上の大学生は従来想定されていた人数よりもやや多いという結果であったが、若林ら（2004）の研究に比べ今回の研究では対象者が少ないことや単一の専攻のみが対象者となっていることもあり単純に比較できない。AQ の総得点をカットオフポイントで区切った場合に自閉症スペクトラム傾向が高いと判断された対象者は、優柔不断といった性格や強迫症状の checking や doubting および強迫症状の総得点がカットオフポイント未満の対象者に比べて高いという結果となり、強迫行為や強迫観念といった OCD の主要症状に関連がみられることが示唆された。

本研究のまとめと課題について

従来の研究では、強迫性格と心理的精神的不適応との関連や、強迫症状と強迫性格との関連が議論されてきた。今回の研究では、強迫的心性として強迫性格と強迫症状を取り上げ、それらが自閉症スペクトラムとどのような関連を示すのか検討した。

本研究結果から、強迫症状を予測する要因に強迫性格だけではなく自閉症スペクトラムを含めることで説明率が増加することが示唆された。さらに、自閉症スペクトラム傾向の中でも注意の切り替えの苦手さや細部へこだわるといった側面が関連しているとかんがえられる。また、強迫性格では、優柔不断といった特性が強迫症状および自閉症スペクトラムにも関連していることが明らかとなった。大久保・大宅（2015）でも、大学生における精神的な問題に強迫性格の「優柔不断」因子がその要因の1つとして見出しており、大学生の心の問題についての支援において重要な要因であることが示唆された。

しかし、専攻分野も単一の対象者であり人数も少なく、研究対象者に偏りがあることは否めない。強迫性格や自閉症スペクトラムもこだわりが中心の要素となる中で、研究対象者も広く様々な専攻の学生とすることが必要であろう。

最後に、子どもや子育て支援と本研究の関連について述べる。本研究では、未知のことへの不安を抱えている大学生の問題を検討した。多くの大学生は、将来、保護者になる。子どもを育てる立場になるのである。第一子の子育ては、すべてが未知のことに他ならない。第二子以降もその子どもの特性を知れば知るほど未知のことに直面する。自分の特性を知り、自分が変わること、自分を変えることを楽しめるよう、さらには未知のことに直面できるよう、不安に対処し、乗り越えられるように支援していくことが、社会に求められる課題であろう。

引用文献

- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J., & Clubley, E., : The Autism-Spectrum Quotient(AQ): Evidence from Asperger syndrome/ high-functioning autism, males and females, scientists and mathematicians., *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 31, pp.5-7, 2001.
- 独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）：平成26年度学生生活調査
http://www.jasso.go.jp/about/statistics/gakusei_chosa/_icsFiles/afieldfile/2017/06/16/data14_all.pdf, 2018.2.4.
- Hodgson, R. J., Rachman, S. : Obsessional-compulsive complaints., *Behavior Research and Therapy*, 15, pp.389-395, 1977.
- 細羽竜也・内田信行・生和秀敏：日本版モーズレイ強迫神経症質問紙(MOCI)の因子論的検討，*広島大学総合科学部紀要IV理系編*, 18, pp.53-61, 1992.
- 神尾陽子：成人期の自閉症スペクトラム 診療実践マニュアル，医学書院，2012.
- 加藤華子・濱田秀伯：強迫の症状学，*精神科治療学*, 22(5), pp.485-490, 2007.
- 大久保純一郎・大宅洋行：大学生における強迫性格と発達障害傾向ならびに精神的健康の関連性，*帝塚山大学心理学部紀要*, 6, pp.1-6, 2017.
- 大宅洋行・大久保純一郎：大学生における強迫性格と自閉症スペクトラム傾向の関連性，*関西心理学会第126回大会発表論文集*, pp.20, 2014.
- Salzman, L : THE OBSESSIVE PERSONALITY Origins, Dynamics and Therapy, Jason Aronson, Inc., 1968.: 成田善弘・笠原嘉 訳：強迫パーソナリティ，みすず書房，1998.

- 関山徹：高校生における強迫性格と精神的健康, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 18, pp.163-173, 2008.
- 住谷さつき：自閉症スペクトラムと強迫性障害, 児童青年精神医学とその近接領域, 53, pp.496-500, 2012.
- 竹内直樹：強迫性障害：松下正明 総編集, 現代児童青年期精神医学（臨床世親医学講座 11）, 中山書店, 1998.
- 吉田充孝・切池信夫・永田利彦・松永寿人・山上榮：強迫性障害に対する Maudsley Obsessional Compulsive Inventory(MOCI)邦訳版の有用性について, 精神医学, 37(3), pp.291-296, 1995.
- 若林明雄・東條吉邦・Simon Baron-Cohen・Sally Wheelright：自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版の標準化-高機能臨床群と健常成人による検討-, 心理学研究, 75(1), pp.78-84, 2004.